

2 北円堂院の歴史

(1) 創建から再々建まで

北円堂院は興福寺の主要堂宇のなかでも早くに造営されたもののひとつである。前後2回にわたる焼亡を経て、現在の北円堂は3代目にあたる。以下では3度の造営をそれぞれ「創建」「再建」「再々建」と称し、区別することとする。

創建 北円堂院の創建については『興福寺流記』が基本史料となる。それによると、北円堂院は藤原不比等の供養のため元明天上天皇・元正天皇が長屋王に命じて造営を開始し、一周忌にあたる養老5年(721)8月3日に完成したとされる。また、方別1丈7尺の八角円堂に弥勒仏像以下9体の尊像を安置し、まわりを「廉廊」(=回廊)がめぐり、「南門」が付設されたことも記されている。

『続日本紀』には、養老4年10月に「造興福寺仏殿司」が設置されたとの記事がある(これは正史における興福寺の初見でもある)。この造興福寺仏殿司については、その時期や同時に置かれた養民司・造器司の性格などを根拠に、北円堂院の造営を主目的とする官司とみるのが一般的である。一方で異説も存し、「仏殿」の語から中金堂造営のための官司とする説、あるいは実質的な興福寺の造営開始を示すとする見解もある。さらには近年の発掘調査で判明した中金堂院のプラン変更をともなう大規模な改造という事実に基づき、伽藍全体の改造・整備を担う官司と解する説も提唱されている(馬場基「創建期の興福寺」『奈良歴史研究』60、2003年)。

なお、本調査の主要対象である回廊について『興福寺流記』所引「宝字記」はその規模を、東西両面回廊各14丈7尺、南門左右の南面回廊各6丈2尺、北面回廊15丈、「広」(=梁行)1丈1尺、と記している。これに信をおけば、南門の桁行は2丈6尺(=15丈-(6丈2尺×2))となる。

再建 永承元年(1046)12月、民家への放火が延焼し、興福寺は伽藍のほとんどすべてを焼失する。興福寺にとって初めての大規模な罹災である。このとき北円堂院は幸運にも難をまぬがれたものの、2年あまり後の永承4年2月、唐院・伝法院とともに焼亡の憂き目に遭う(『扶桑略記』)。

再建は寛治6年(1092)まで遅れることとなる。理由のひとつは康平3年(1060)に諸堂が再び焼失したことにあるが(『康平記』)、中枢区画たる中金堂院や維摩会が催される講堂などの復興が優先された影響も否定しえないであろう。また、9世紀以降の藤原北家(摂関家)の隆盛により北家中興の祖・藤原冬嗣の建立した南円堂に信仰が集中したこと、一方の北円堂は藤原氏と直接の縁戚関係にない元明・元正両女帝の発願になることなども、北円堂院の位置づけを相対的に低下させる一因となったと推察される。

ただし、寛治6年正月19日の再建供養は盛大に執りおこなわれた。関白藤原師実が内大臣藤原師通以下の公卿を引率して参会し、請僧は100人を数え、また特に公家(天皇家)から勅使や勳賞も下されたという(『扶桑略記』『百練抄』)。このときの様子は『中右記』『後二条師通記』など古記録類に多くの記事が残り、とりわけ『為房卿記』の記述は詳細をきわめるが、これらによって式次第が御齋会に准ずるものであったこと、円堂のみでなく回廊も再建されたこと、その四面に「中門」が設けられたことなどが確認される。

再々建 治承4年(1180)12月、源平の争乱のなかで平重衡は南都を焼討ちし、興福寺の伽藍は全域が灰燼に帰した。「凡非言語之所及、非筆端之可記」(『玉葉』)と評される惨状のなかで北円堂院も例外たりえず、2度目の焼亡を迎えることとなる。

第2表 北円堂院関連略年表

和暦	西暦	月	日	事項	備考	典拠
養老4	720	10	17	養民司・造器司とともに造興福寺 仏殿司を置く	正史における興福寺の初見、「仏殿」は 北円堂を指すか	『続日本紀』
養老5	721	8	3	北円堂院完成 (= 創建)	藤原不比等の供養のため元明太上天皇・ 元正天皇が長屋王に命じて造営、不比等 の一周忌に合わせる	『興福寺流記』所引「宝字記」、 『扶桑略記』
永承4	1049	2	18	北円堂および唐院・伝法院焼失		『扶桑略記』ほか
寛治6	1092	1	19	北円堂院完成・供養 (= 再建)	康平3年(1060)の諸堂焼失のため再建 が遅れたか	『為房卿記』『中右記』ほか
天仁2	1109	7	5	北円堂供養	安置諸像の供養を指すか	『興福寺略年代記』『一代要記』
治承4	1180	12	28	平重衡の南都焼討により北円堂を 含め伽藍全焼		『玉葉』
建仁1	1201			北円堂造営を備後国に宛てる	実行されたか未詳	源通親書状礼紙
承元1	1207	8		興福寺より北円堂再興を請う勸進 状あり	安置諸像の造立に先立ち着工か	『弥勒如来感応抄』興福寺所司 北円堂再興奉唱状案
承元2	1208	12	17	北円堂安置諸像の造立に着手	本尊胎内納入品に建暦2年(1212)の年 紀あり	『猪隈関白記』
承元4	1210	11	26	北円堂の宝形 (= 露盤・宝珠) を 据え上棟に擬す	間もなくの完成 (= 再々建) を示すか	承元四年具注曆裏書
建保4	1216	10	21	同年2月5日に供養した後鳥羽上 皇宸筆瑜伽論百卷を北円堂に奉納		『大乘院日記目録』
明治30	1897	6	10	古社寺保存法制定	第1回指定により北円堂が特別保護建造 物、安置諸像が国宝に指定される(12月 28日付)	
昭和4	1929	7	1	国宝保存法施行	北円堂は国宝指定を受ける	
昭和25	1950	8	29	文化財保護法施行	北円堂は同年に重要文化財指定、2年後 に国宝指定を受ける	
昭和37	1962	11	1	北円堂解体修理開始	同40年6月30日まで、38年に部分的な発 掘調査をおこなう	
昭和50	1975	11		北円堂院回廊を部分的に発掘調査	防災工事にともなうもの	
昭和52	1977	3		(= 防災調査)		

明けて養和元年(1181)6月には造興福寺行事官の任命や国宛がおこなわれるなど、復興体制は迅速に整えられていく。それでも伽藍全体の復旧には相応の時日を要することとなった。太田博太郎氏の研究によると造営事業は三期に大別でき、それぞれの期間、および造営された主要な堂宇は以下のとおりである(『南都七大寺の歴史と年表』岩波書店、1979年)。

第一期 治承5年～文治2年(1181～1186) 食堂・東金堂・西金堂・講堂

第二期 文治2年～建久7年(1186～1196) 中金堂・回廊・南大門・南円堂

第三期 建久7年～寛元年間(1196～1247) 五重塔・僧房・北円堂・春日東西塔

このように、北円堂の造営は事業の末期に位置づけられる。第一期の造営計画を伝える『養和元年記』にも「北円堂今度無沙汰」と記されており、やはり金堂・講堂などのほうが優先度が高かった様子が認められよう。以下、諸史料より北円堂再々建の経過を確認する。

建永2年(=承元元年、1207)8月、興福寺より「請_レ被_レ如_レ旧建_レ立北円堂院_レ状」が提出され(『弥勒如来感応抄』)、復興事業は本格化する。翌年12月には安置諸像の造立も開始された(『猪隈関白記』)。ただし『猪隈関白記』には「北円堂未_レ棟上_レ也」とも記され、この時点で北円堂が未完であったことが確認される。そののち承元4年(1210)11月に北円堂の「宝形」(=露盤・宝珠)を据え上棟に擬したとの記録があり(承元四年具注曆裏書)、このころ落成したとみて大過ないであろう。また、本尊弥勒仏像胎内の願文には建暦2年(1212)の日付があり、諸像も間もなく完成したものと思われる。

こののち北円堂は大きな災禍に遭うこともなく、この再々建の堂舎が現在まで伝えられている。また安置諸像は奈良仏師の運慶が一門を率いて造立したものであり、本尊の弥勒仏像はもとより、特に無著・世親像は日本彫刻史上の傑作として高く評価されている。

(2) 中・近世の北円堂

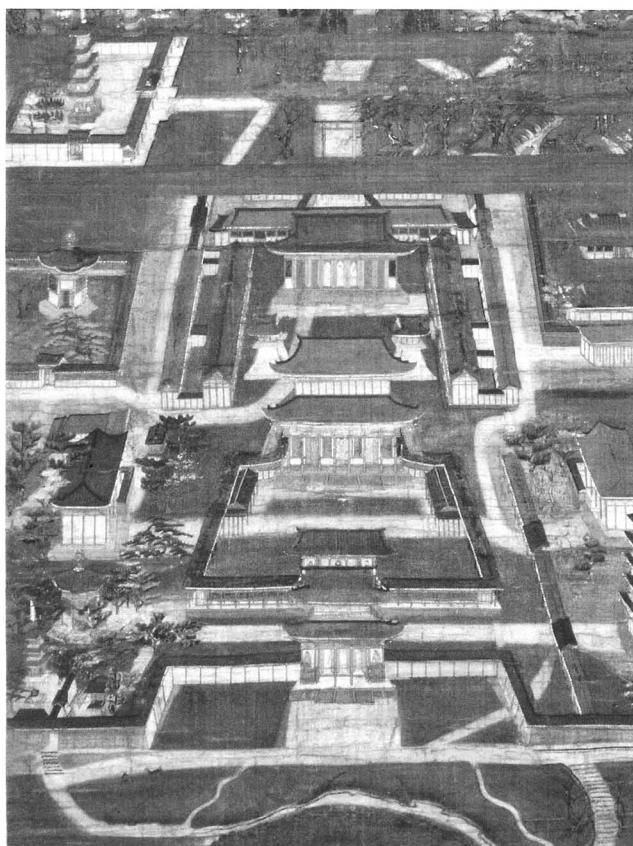
以上のように、現在の北円堂は13世紀初頭に完成した再々建の堂舎であり、興福寺では三重塔とな

らび現存最古の建造物となる。ただし回廊に関しては問題が残る。再々建時、回廊についても創建当初の姿に即した造営が企図されたことは確認できるが（『弥勒如来感應抄』）、それが完成に至ったかは明証を欠く。現在の北円堂に回廊は付属せず、仮にこのとき完成していたとすれば、廃絶の時期も問われなければならない。以下では絵画資料を基にこの問題を考え、中・近世の北円堂（院）の姿を垣間見たい。

春日曼荼羅 神仏習合思想を背景に、平安時代末から中世にかけて多く製作された春日大社関連の神道曼荼羅は、春日曼荼羅と総称される。春日社社殿や春日野の風景を描写する春日宮曼荼羅、鹿をメインモチーフに据える春日鹿曼荼羅、春日社に祀られる神々やその本地仏を描く春日垂迹曼荼羅・春日本地仏曼荼羅、両者の混合形式である春日本迹曼荼羅など、さまざまな種類がある。

ここでは、春日社寺曼荼羅と呼ばれる一群が注目される。宮曼荼羅の下半に興福寺の伽藍を描き加えたものであり（興福寺部分を各堂宇の安置仏像によって表現する場合もある）、中世の興福寺の様相をうかがいうる資料となる。室町時代の製作と目される第2図の「春日社寺曼荼羅図」はこの形式を代表する作例であるが、画面左端の北円堂のまわりに回廊が描かれていることが認められよう。これによれば、やはり再々建時に回廊もあわせて造営され、それが少なくとも室町時代までは存続していたようにも思われる。

しかし、同図の描写を無批判に信用することは慎むべきであろう。同図を含む春日曼荼羅はそれ自体が信仰の対象たりうるものであり、そこに描かれた内容が、必ずしも現実に即しているとは限らないからである。同図についても、たとえば『興福寺流記』などを参照して興福寺の本来あるべき（と考えられた）姿を描き出した可能性は充分想定されるところであり、回廊の有無に関しては参考の域



第2図 春日社寺曼荼羅図（部分、興福寺蔵）

を出るものではない。なお、これについては今回の調査所見とあわせて「6 結語」の項で再説する。

大和名所図会 『大和名所図会』は、京都の文人・秋里籬島の著した絵入り地誌である。絵図は大坂の浮世絵師・竹原春朝斎信繁の筆、刊行は江戸時代後半の寛政3年（1791）。籬島ははじめ、渋る書林を説得して京都の地誌『都名所図会』の刊行に踏み切ったが、それが予想外の好評を博し増刷を重ねることになったため、拾遺や五畿内諸国の名所図会をも撰述するはこびとなったという。『大和名所図会』もそのうちのひとつであり、春朝斎とのコンビは『都名所図会』以来のものとなる。

同書の特徴のひとつに、現地主義に基づく広範な踏査、およびその成果としての正確かつ細密な描写が指摘しうるであろう。書林や掲載寺社の支援を得て、籬島・春朝

斎は大和の寺社をあまねく遍歴し、同書を完成させたとされる。

興福寺は同書の巻二に収載されており、伽藍の全景が見開き2頁にわたり活写される(図は『概報I』参照)。ここで北円堂のまわりに回廊(およびその他の区画施設)が描かれていないことは見逃し難い。上述のように同書の絵図の写実性は相当程度信用しうらと思われ、少なくとも同書の成った18世紀末の時点で、北円堂が回廊その他をともなわない単一の堂舎として存立していたことは認めてよいであろう。

なお同図には、北円堂の東方を北東-南西方向に横切る道、およびそこから西に延びて北円堂東面階段に取り付く道が描かれている。これらは今回の調査で検出した道路遺構SF9975・9976に該当すると思われ(詳細は「3 遺構」の項参照)、この点も同図の正確性を約する一証左となろう。

(3) 明治期以降の北円堂

興福寺は長い歴史のなかで幾度も災禍を被ってきたが、とりわけ神仏分離・廃仏毀釈の嵐にまかせて襲いかかった明治初期の激震は、その最たるものといえよう(藪中五百樹「明治時代に於ける興福寺と什宝」『立命館大学考古学論集』Ⅲ-2、立命館大学考古学論集刊行会、2003年)。慶応4年(=明治元年、1868)の神仏判然令により興福寺の僧侶・衆徒は全員春日大社に参仕することになり、明治4年(1871)の上知令で堂舎・境内地の多くを失い(ただし北円堂は残される)、翌年の教部省指令では「興福寺」の名号までも奪われ、ひとたびは廃寺となることを余儀なくされた。

その後は、いきすぎた仏教弾圧とそれによる文化財の損失を憂う世情にも助けられ、興福寺は徐々に復興してゆく。この時期の重要な出来事のひとつに、明治30年(1897)の古社寺保存法制定が挙げられるであろう。これにより興福寺は多くの堂舎が特別保護建造物の、また仏像をはじめとする寺宝が国宝の指定を受けたが、そのリストには北円堂や安置諸像も名を連ねる。古社寺保存法は昭和4年(1929)制定の国宝保存法に引き継がれるが、北円堂はそれにもない改めて国宝指定を受け、さらに同25年施行の文化財保護法により重要文化財、同27年には再び国宝となり、現在に至っている。

戦後になると、部分的にはあるが北円堂院に対する発掘調査もおこなわれた。まず昭和37~40年(1962~1965)の北円堂解体修理にともない北円堂基壇の地下部分が調査され(奈良県文化財保存事務所編『重要文化財興福寺大湯屋・国宝同北円堂修理工事報告書』1965年)、続いて昭和50・52年(1975・1977)には興福寺防災施設工事にともない回廊部分が調査された(=防災調査、興福寺編『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』1978年)。とりわけ防災調査では、回廊の北・東・西各面で基壇や礎石および地覆石・羽目石等を確認するなど、大きな成果を挙げている。

北円堂院の復原研究としては、大岡実氏による『南都七大寺の研究』(中央公論美術出版、1966年)がある。同書は大岡氏が昭和16年(1941)に東京大学工学部に提出した学位請求論文『興福寺伽藍配置の我伽藍制度史上に於ける地位を論ず』を基幹としており、興福寺伽藍全体の復原が試みられている。このなかで氏は『興福寺流記』の記述や遺存礎石などから、北円堂院回廊の柱間は9.5尺を基本とし、四隅と東門部分は11尺、北門部分は14尺とする復原案を提示している。また南門は桁行3間、梁行2間、中央間が13尺、その左右が6.5尺とする。

興福寺の各堂宇は伝統様式にのっとる点に特色があるとされるが、なかでも北円堂は奈良時代以来の和様の趣をよく伝えており貴重である。一方で鎌倉時代の新たな息吹を感じさせる意匠も認められ、落ち着いたたたずまいのなかに緊張感あふれる調和を兼ねそなえる名建築として、高い評価を得ている。